



尾崎校長



小田原教頭

3月と4月は別れと出会いの季節です。その邂逅が互いを固い絆で結ぶことがあります。今回はJリーグのジュビロ磐田のホームタウン磐田市に大正11年創立された静岡県立見付中学校(現、静岡県立磐田南高校)の創立と発展に関わった三人の教育者について紹介しましょう。なぜ今更、大昔の静岡県の見付中学校なのか!三人とも我が土浦中学校で出会い、深い縁で結ばれたからです。その三人とは遣澤校長、国語・漢文科の小田原勇教諭、同じく国語・漢文科主任の尾崎楠馬(クスマ)教諭です。本稿の主役は、同窓生は勿論、在校生諸君も誇らかに歌う♪沃野一望教百里・・・♪の作曲者である尾崎先生と盟友小田原勇先生です

三人の摩訶不思議な邂逅

遣澤校長は、東京高等師範卒業後、兵庫・群馬・岐阜・大阪等の中学校教諭を経、初代龍ヶ崎中学校校長を拝命。教育の眼目は生徒への愛情にあるとし、劣等・不行状・粗暴等の生徒への愛情を強調し、授業は知識を与えるよりも教科目に興味を起させ、自ら研究する態度を培うこととあるとした。知識一辺倒の教育の弊害を予測し、生徒と遠足を能くする等、生徒と共に行動する教育方針、師弟同行を以て実践した。明治37年9月土浦中学校長として赴任。直ちに矢継早に改革に着手した。その第一号に運動会の改革も含まれていた。しかし、皮肉にもその運動会での生徒の余興、ヒョットコ事件の責を負って、改革半ばにして39年11月職を辞した。遣澤校長の理念は、小田原・尾崎の全人教育の思想の基となった。

小田原教諭は、明治39年11月早稲田大学を卒業、遣澤校長により、同年10月国漢科教諭に採用され、41年1月までの16か月在職した。赴任するや、伝馬船二隻のみの水上部部長を命じられた。小田原は、「天恵の霞ヶ浦を持ちながら何等の不見識何等の意気地なしと騒ぎ立て散々手古摺らせた上、ついに短艇新造三隻、中古練習艇二隻を購入することに成功した(創立十周年事業の一環でもあった)」

尾崎教諭は、明治39年東京高師在学中遣澤校長に白羽の矢を立てられ、学校改革の布石にと、国漢科教諭に採用、同科主任に抜擢が予定された。尾崎は、採用され国漢科主任を命じられたが、遣澤校長は既に辞職し、土浦中学校で教育活動を共にすることはなかった。しかし、同窓同郷出身の遣澤との知己を得たことは、後年公私において幾多の支援を受ける基となった。

尾崎楠馬の生い立ち 土浦中学校まで

尾崎は、明治11年10月1日、高知県安芸郡赤野村76番屋敷で誕生。3歳の時、弟出生のため、母の実家船本家に預けられ、叔父楠吉夫妻に養育された。幼少時は、祖母に育てられた。

5歳3ヶ月(明治17年7歳)で安芸小学校に入學したが、教師だった叔父の転勤に伴い、転校が続いた。明治29年(19歳)高知県師範学校入學、33年卒業。安芸郡芸陽小学校訓導を拝命し、教職の道を歩み始めた。同年6月入営。34年退役し、高知県立第一中学校助教諭心得兼務



ボート部艇庫と部員(明治44年)
小田原先生の尽力の成果

分校勤務を命じられた。明治三十六年高等師範学校入學、四〇年(三〇歳)国語漢文部を卒業した。

水泳・端艇・校歌作曲・楽隊指揮

明治40年4月5日、茨城県立土浦中学校教諭を拝命、着任と同時に国漢科主任と舎監兼務を命じられた。高師では、端艇の選手としても活躍、テニスも堂に入ったものであった。音楽にも堪能でオルガンを巧みに弾き、唱歌を好んで歌った。彼の楽才や水泳(21歳で水泳術練習50町渡終了)・端艇の技能は生徒達の為に惜しげもなく同時多発的に発揮された。

顧問として水泳部を熱心に指導し、例年7月田村弁天下で行われた水泳訓練をも担当した。彼は生徒達とよく鹿島遠漕を行った。42年8月の遠漕では、第1日目北浦の小学校の裁縫室に泊めてもらった。「狭い部屋は暑く、蚤はしきりに刺す、蚊帳は臭気を発し、蚊は隙を見て入り込み、中々寝付けなかった。そのような状況の中、尾崎はオルガンを奏で始めた。生徒たちは一曲一節を聴いているうちに、何時の間にか華宵の国※に導かれた」という。

※黄帝が夢に遊んだという理想的な太平の国、昼寝の意味もある

土浦中学には音楽の授業はなかったが、運動会では、「尾崎楽長の骨折りで、練習の功空しからず、絶えず行進曲を奏し競技者には一段の景気を添え、観客の耳を楽ませた」

明治43年7月、夏休みを前にして、全校生徒に校歌作詞の宿題が出された。応募者は、多くなく、四年生の堀越晋の作品が入選した。

明治44年四方拝の後、選定校歌が発表された。尾崎は、堀越の詞を補筆し、曲をつけた。明治39年、第二回卒業生名越那珂次郎は、進修8号の「会友通信」欄に第二高等学校の生活を紹介する「仙台通信」を寄せ、その中で近來全国の中学校で校歌制定が流行していると述べ、「桜水健児の意気を鼓舞するの校歌を合唱し、進修の気躍々として常南の天を風靡するの痛快なるに如かずと存せられ候」と、母校の校歌誕生を強く訴えた。彼の校歌制定への切なる願いは、数年の歳月を経てやっと叶えられた。

土佐ツボ・尾崎と薩摩ツボ・小田原

尾崎と小田原は、何故か気が合い、切磋琢磨すると共に、互いに尊敬の念で結ばれていた。元榛原中学校長小田原は、盟友尾崎への回想文で、「恐らく土佐ツボと薩摩ツボの一脈相通する何等かの共通点結び付けたものである」という。以下の文の殆どは、その回想に依った尾崎のプロファイルである。彼の尾崎観と言ってもいい。

五分刈り頭に浅黒い顔、姿婆気もなく、気取った所など微塵もなかった。ただ不屈の意志の閃きと時あって紫電迸る力を深淵の底に秘めた双眸だけが、異色であり、鼻下の黒い美髯のみが異彩を放っていたに過ぎなかった。人に接しては温厚、礼儀正しく、時には諧謔を弄し笑わせたが、一面犀利鋭鋒人の肺腑を抉る毒舌もあつた。曲がったことは、秋毫も呵責しない厳しさがあつた。

「僕は高師受験準備の際『言海』を読破したよ」と事もなげに語った事があつた。それは言海のみでなく、天資の英才に加えて、恐らく根限り力限りの読書研鑽をしたに違いない。富嶽が雲表に聳ゆるは、広大な裾野あつてのこと、其の裾野こそ青年時代の刻苦勉勵の蓄積そのものであつた事は、間違いない事実であろう。

二人は、日曜毎によく登山をやつた。筑波の嶺続きの閑居山に登り、忽然咫尺を弁せぬ濃霧に襲われ、一歩も動けず山頂に寂然不動の幾時間を経過した時もあった。湖上に端艇練習の生徒と共に夕焼け雲の薄れゆく西の方に紫と浮かぶ筑波の嶺を仰ぐは日曜に限ったことではなく、放課後の毎日と言つていい位であった。着任早々、水上部長になった小田原は、端艇の購入を提案し、認められた。東京からの新艇は無事着いたが、練習艇二隻は行方不明になった。校長の命を受

(裏面に続く)



旧見付中学校正門（大正15年）

小田原先生は、やがて土中生が、「オールを握らざる者は亀城健児に非ず」と自負する程の端艇競漕が隆盛をする素地をつくり、尾崎先生が、更に発展させて、土浦中学を去りました。二人はそれぞれの道を行っていました。大正11年見付中学校創設を機に再会し、同校の校長・教頭として真の人間教育をめざして協力し奮闘しました。今でも二人の建学の精神は、「見中魂」と語り継がれ、両先生は、見付中・磐南高の同窓生や在校生・地域の人々の尊敬の的となっています。尾崎先生には、頌徳碑を建て、近年「尾崎先生50年忌法要」を営み、小田原先生にも、防風堤の「小田原山」に顕彰碑を建て、お二人の功績を讃えています。このことを伝え聞いた本校同窓会の間でも話題となり、昨年12月、同窓会役員と卒業生有志数名で磐田南高にお邪魔し、尾崎先生の墓参をさせていただきました。こうして新たな両校の結びつきは、土浦中学でのお二人のご尽力、特に尾崎先生の残された校歌などによって生まれました。この事実を本校生徒にも知って欲しいということで今回このようなメッセージを記しました。（なお、掲載した諸資料は磐田南高校訪問時に頂いたものを使用させていただきました）

け、尾崎と潮来方面へ搜索に向かった。二人の乗った蒸気船が、夕刻潮来の堀割に入った時のことを、次のように述べている。「船上人語絶えて、両面真菰の中、虫声水底に湧く。気清くして俗塵を絶し、天来の神興月光と共に永劫に消えず。この時二人の影は甲板上に黒く印して動かず、亦一語も発することなく凝然として無心。若き二人には何等の野心なく、俗念なく、ただ青年教育者としての誇りがあり、何ものにも屈せない意気があった」と。小田原は、此の日此の時の無名の青年尾崎馬氏の姿を「私が私の秘宝として胸底深く蔵している尾崎楠馬氏の姿」とも記している。

別れは、青天の霹靂

明治40年12月小田原の元に郷里から熊本歩兵聯隊に入営せよとの飛電が届いた。翌年2月の夜、小田原は盟友に送られ、人影疎らな土浦の駅を後にした。二人の結びれし縁の糸は裂帛の汽笛により9ヶ月でふつりと断ち切られた。遣澤校長の全人教育の理念を体得した二人は、この僅か9ヶ月の間に互いに信頼し協力し、土浦中学の基礎造りに大きな役割を果たした。小田原のその後の足跡は詳らかではないが、自分の教育の理想を貫徹するため私立中学校創設の夢と野望を胸に秘め朝鮮に渡り、龍山中学校に勤務していた。尾崎は、彼が去った後も3年余土浦中学校の教育に情熱を傾けその充実に尽力した後、44年東京・青山師範学校に転じた。

磐田原頭の再会

尾崎は、浜松師範教頭を経て、大正15年静岡県立見付中学校校長兼教諭に補せられた。小田原は、土浦時代の盟友尾崎から、今度見付中学校の校長になったから、その教頭に來いと飛電を突然受け取った。彼は、「その任にあらざる堅くお断りする」と返電した。しかし、尾崎も粘った。事務的才幹は皆無、かかる位置につくは迷惑の上なしと言う小田原に、事務なんかのために來いと言っているのではないと返電。「君来すば万事休す」の電報にも小田原は微動もしなかった。

しかし、遣澤氏から「知己の恩を知らぬものは人に非ず」の最後通牒を叩きつけられ、ついに、何もかも捨て、見付中学の基礎工事に知己のための人夫の一人となり身命を捧げようと決然朝鮮を後にした。土浦中学で結ばれた絆は、僅か9ヶ月で終わった筈だったが、15年の歳月を経て甦った。真の人間教育の完遂の為、より強固な形で出発した。



尾崎先生は、書画にも堪能



ドカ中精神は建学のこころ

これは、平成15年発行の盤南高同窓会誌「尾崎楠馬先生50回忌特別号」の見出しの一つである。尾崎校長は、三顧の礼を以て迎えた小田原教頭と共に、大正11年4月見付中学校の開校に漕ぎつけた。二人の人間教育は見事な成果を上げ、4年8ヶ月後の15年11月開校式を挙行政した。開校式に於ける尾崎校長の式辞を次に抜粋する。

「本校創立以来人材の養成を以て教育の眼目とし、特異の校風を挙揚して此の目的を達成せんとし、外に生徒の勤労作業を奨励して質実剛健の気象を養うと共に、又能く環境を整理し美化し自ら高尚優雅の情操を培い、内には図書を充実して精神の糧を与え、以て知徳の啓発に資せんことを期せり。

往昔校舎の落成せし当初は、…校舎の周囲は平蕪荒穢一木の見るべきものなかりしかば、学業の余暇生徒の力を以て樹を遠近より移し、…或は運動場を拡張し防風堤を築き水泳場を備うる等、悉く是血と汗との結晶より成れる開拓創造の跡ならざるはなし。此の間、生徒をして土に親しましめ、労働を重んじ秩序を尊び、逸を避けて労に就くの習いと…其の心身を錬磨すると共に自ら高雅闊達性情を涵養する等、其の効果蓋しすくなくならざるべきを信ず」

人間教育の実践

三顧の礼に応えて教頭職に就いた小田原は、「大学予科や専門学校への進学ばかりに熱中して人の魂を

養うことを忘れていたような教育では駄目だ。心と身体を鍛える教育をすべきだ」と校長に進言した。意気投合した二人は、何もない磐田原で零から出発し、真の人間教育を始めようと決意した。以下、第一回卒業生の回想等からその様子を見てみよう。

見中魂を核とした高い教育目標は、二人のどちらが欠けても達成できなかったと思う。小田原先生あつて初めて尾崎先生は生きたし、尾崎先生あつてこそ小田原先生の『がむしゃら』とも言える教育の実践ができたのだと思う。磐田原に移つてからは、「学園は自分たちでつくる」の合言葉の下に、校長・教頭が先頭に立つて、毎日放課後は1〜2時間鉄を握り、モッコ担ぎ・草むしりをし、運動場造りを始めた。作業後は、まだ石ころ混じりの運動場でクラブ活動に励んだ。正に「ドカ中」のスタートだ。二人が目指したものは、勤労・鍛錬の労作教育を通しての人間教育である。先生も生徒も一緒に汗を流し一つの事を成し遂げる「師弟同行」の下に、当然生徒達も燃えたとと思う。その労作教育は、更に校庭の拡張工事へと進んでいった。原野を切り開いた運動場の砂埃を防ぐために、教頭の提言によつて幅十〜四〜五尺、高さ六尺、延長一五〇尺の大防風堤造りも併行して始まった。こども「師弟同行」の作業が進められた。校長先生も真っ裸になつて背中を日に照らされながら、生徒と並んで草取りをした。校庭の拡張と防風堤造りは、全部生徒の手で行った。土方仕事ばかりやらせて勉強をやっているのかという批判は当然起きた。第一回卒業生から次々と優秀な上級学校に合格者が出るに及んで風向きは変わった。

防風堤の一番北の角の高い所を、「小田原山」と呼んでいる。そこには、「小田原教頭の顕彰碑」が建てられている。小田原教頭は、怖い先生と思つている人が多いようだが、見中三回生のアルバムの一頁に「吾等の小田原先生」と題された一枚の写真がある。実は、「吾等の」と言う詞から分かるように生徒から慕われていた。校長の右腕として悪役を引き受けていたのである。



小田原先生と小田原山